

新 院長に聞く

認知症で生活が困難な際の最後の砦

アルツハイマー病の簡易検査を開発 スクリーニングツールとして広く普及

亀田北病院院長

宮澤仁朗

亀

田北病院（函館市石川町）の新院長として、4月1日に就任したのが宮澤仁朗医師だ。同病院は昭和62年亀田病院の分院として精神科を石川町に移転し、206床の精神科病院として開設された（現在は398床）。平成10年の増改築を経て、精神疾患や心の病氣、認知症を中心に診療し、地域の精神科医療に大きな役割を果たしてきた。

H T Bの朝の情報番組で レギュラーコメントーターも

宮澤院長は昭和62年札幌医科大学医学部を卒業。精神科医として精神一般はもちろんのこと、特に高齢者の認知症・うつ病を中心に診療してきた。大学や札幌市内の

精神科病院で臨床・研究に従事するとともに、札幌医科大学医学部臨床准教授として医学部学生の臨床指導にも注力。平成4年ときわ病院（札幌市南区）に勤務し、院長時代はスーパー救急の立上げや救急と慢性期医療の機能分化、重度認知症デイケア、宿泊型自立訓練施設の開設、児童精神外来の開設など、幼児期から老年期まですべてのライフステージに応じた医療・福祉を提供してきた。

札幌市介護認定審査会会長や札幌市精神科医会副会長、北海道精神科病院協会理事、北海道労働災害委員会精神部会委員、社会保険診療報酬支払基金北海道支部審査委員会委員、札幌市認知症初期集中支援推進事業チーム・リーダー、厚生労働省認定・認知症サポ

ート医など、多くの対外的な役職にも就いてきた。また平成23年から4年余り、北海道テレビ放送（HTB）の朝の情報番組「イチオシ！モーニング」でレギュラーコメントーターを務めるなど幅広い活躍で知られている。

簡易検査開発のきっかけは スペインでの国際会議

アルツハイマー病のスクリーニングツールとして開発された簡易検査「MeiCDT」（記憶付加型時計描画テスト）は、平成25年秋から全国のかかりつけ医などに2万部が無償で配付された。この検査キットを作成したのは宮澤院長と道外の2人の医師だ。開発のきっかけは2011年3月の

東日本大震災時に宮澤院長が出席したスペインでのアルツハイマー病の国際会議だった。「関連セミナーの司会を務める直前、スペイン人の神経内科医から地震の発生と津波のことを聞きました。インターネットの映像で甚大な被害の様子を知り、二度と日本の土を踏むことはできないのではという絶望感に襲われました」。この国際会議の会場で東京と京都の神経内科医との出会いがあり、日本に戻ることができたら、3人で世界に向けて発信できる共同研究を立ち上げようと誓い合った。そして、3人が考案したのが世界中で利用可能な簡便で検出能の優れた認知機能検査だった。

「認知機能検査ではMMSEという検査が国際的にも多く用いら